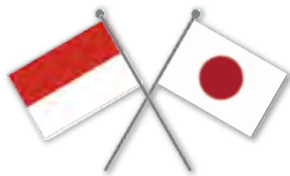


Bintang pari

南十字星



南十字星会
大阪大学外国語学部
インドネシア語専攻同窓会

第29号

2023 夏

Contents

2... 最近のインドネシアについて感じる事	南十字星会会長 小原 一浩 (1963年卒)
3... EPA※看護師・介護福祉士候補者 国家試験への挑戦...	西田 達雄 (1960年卒)
5... Salam dari Kampus キャンパス便り	原 真由子教授
7... Kisah Saya di Osaka	Cynthia Vientiani 特任教官
9... 留学体験記	堀口 愛花 (現役生)
11... インドネシア語同窓会での「放談」	事務局
13... プラムディア・アナンタ・トゥール作品を読みましたか？	宮崎 衛夫 (1965年卒)
15... 第11期生・同期の桜、烈士の碑を訪問	剣 小平 (1963年卒)
17... 「インドネシア独立への悲願」を読んで	榎谷 昌博 (1956年卒)
19... ジャカルタの新しい中華街、PIK	土橋 瑞江 (1996年卒)
21... インドネシアの貿易投資動向と日本 (2021-22)	榎谷 昌博 (1956年卒)
24... インドネシア大統領選挙と政党	榎谷 昌博 (1956年卒)
27... ジャカルターバンドン間的高速鉄道の現況と問題点	事務局
29... 宮本和佳氏の海外現地レポート紹介	事務局
31... インドネシア全州踏破を目指して 『リアウ諸島州大ナトゥナ島編』	坂口 広之 (1988年卒)
33... 咲耶会本部事務局紹介	咲耶会事務局長 井上 泰子 (E-1967年卒)
35... アリムルトポ将軍の韓国への苦言	事務局
36... 8020運動をご存知？	剣 小平 (1963年卒)
37... 2023年東京支部懇親会に出席して	K.O
38... 協賛者一覧・投稿&寄稿のお願い・人物アーカイブ企画へのご協力を	
39... 会計報告・編集後記	

表紙の写真 パレンバン・ムシ河・アンペラ橋

写真提供 坂口 広之 (88年卒) 在Bandung (2016年撮影)

パレンバン中心部を東西に流れる大河・ムシ川は全長約750キロ、河口からは外航大型船も登って来るインドネシアで5番目に長い河川である。パレンバンでの川幅は250メートルにも及ぶ。古来より船でしか渡れなかったムシ川に橋を架ける構想はオランダ植民地時代からあったが計画止まりに終わっていた。実現したのは独立後の1960年代。日本の戦後賠償と技術協力で1962年に富士車両が建設を開始し1965年に完成した。その間には林喜久雄(元ニチメン60年卒)、小原一浩(元富士車両63年卒)も従事。1966年に橋の名前は「ブン・カルノ」から「アンペラ」へと変更された。スカルノ大統領自らが当時の風潮に鑑みて名前を変更したという説もある。その後1990～1994年JICA資金で修復。

「アンペラ」(Ampera)とは「国民の苦難を委託する(Amanat Penderitaan Rakyat)」の略語である。アンペラ橋への名称変更後、翌年の1967年、スカルノ大統領在任中に実権を握ったスハルトが発足させた内閣

の名称でもある。まさにインドネシアの時代の転換期を如実に表す名称を持つ橋となった。橋の開通で、分断されていたパレンバンは念願の陸路移動が可能となり、同地域の経済発展に大いに寄与している。このパレンバン、先の第2次大戦で石油を狙った日本軍の落下傘部隊が降下し、市民から「空からの植民地解放の白い神さんが、」と迎えられたとか。

その後、2018年にアジア競技大会開催に併せてLRT鉄道橋が併設され、アンペラ橋と共にパレンバンの名所になっている。



アンペラ橋遠望 (現在)

最近のインドネシアについて 感じる事



南十字星会会長
小原 一浩
(1963年卒)

先進7か国首脳会議（G7）が日本の広島で開催された。法の支配や国際秩序の強化など価値観への支持を訴える貴重な機会であった。原爆使用や第三大戦の勃発さえ懸念されるロシアの暴挙を一刻も早く収束する必要がある一方で、G7即ち、日本や西欧諸国への対抗軸としてBRICSの5か国が存在感を深めているし、グローバルサウスを中心とした新興国（インドネシア、メキシコ、トルコ）も台頭して来ている。

インドネシアのジョコ・ウイドド大統領がロシアのウクライナ侵略に関連してプーチンに会いに行ったことも驚きであった。1963年私がインドネシアのパレンバンでの橋梁建設工事（戦後賠償）に従事していた半世紀前は日本とインドネシアの人口は同じ位であった。それから半世紀が経過し、今ではインドネシアは日本の2倍以上であり、減少傾向にある日本と比較してインドネシアは増加傾向にある。昨今、新興国が存在感を高めている背景には、成長する経済力がある。或るコンサルの推計によると新興7か国が世界経済に占める国内総生産のシェアが今から7年後の2030年にはG7を上回る。その中でもインドが特に勢いがあり、人口が今年4月末で中国を抜き、世界最多になると国連が発表した。USに次いでインドネシアは今では人口が世界第4位であり、生産年齢人口が増え続けている。

さてそのインドネシアだが、一般の日本人にとってはバリ島が観光地として余りにも有名で、その他はあまり知られていないのが実情である。面積が約189万平方キロメートル（日本の5倍）、赤道にまたがり東西5,110 kmに及び、1万3千500もの島々からなる世界最大の島嶼国家である。旧蘭領東インド地域をまとめ、多様性の中の統一共和国として存在感を増している、東南アジアの中で唯一のG20のメンバーでもある。広大な領土には地域ごとに独自の文化や言葉を持っているが、公式で共通言語がインドネシア語であり、マレーシア、ブルネイ、シンガポールを含めると3億人以上の人々に話されている。強大な民主主義国家としてインドネシアと日本との政治経済関係は大変重要であり、将来に亘って友好関係を継続して行くべき国であるのは論を待たない。両国の関係その他の議論は専門家に譲るとして、大阪大学・外国語学部でインドネシア語を学ぶ若き学徒には、現在のリング・フランカである「英語力」を研ぎ、「リベラル・アーツ」を身に付け、多大な使用人口を持つ「インドネシア語」を駆使して、グローバル化著しいこの地球上で大いに羽ばたいて欲しいものだと願っている。

EPA※看護師・介護福祉士候補者 国家試験への挑戦

※インドネシア・フィリピン・ベトナムとの経済連携協定



日本インドネシア協会元参与
西田 達雄 (1960年卒)

第112回 看護師国家試験合格者数

(厚労省'23.3.24発表) ※ ()内は昨年度の数字

	受験者数	合格者数	合格率
総計	64,051人 (65,025人)	58,152人 (59,344人)	90.8% (91.3%)
EPA看護師候補者	335人 (370人)	75人 (44人)	22.4% (11.9%)
インドネシア	130人 (142人)	15人 (9人)	11.5% (6.3%)
フィリピン	113人 (135人)	18人 (11人)	15.9% (8.1%)
ベトナム	92人 (93人)	42人 (24人)	45.7% (25.8%)

第35回 介護福祉士国家試験合格者数

(厚労省'23.3.24発表) ※ ()内は昨年度の数字

	受験者数	合格者数	合格率
総計	79,151人 (83,082人)	66,711人 (60,099人)	84.3% (72.3%)
EPA介護福祉士候補者	1,153人 (1,014人)	754人 (374人)	65.4% (36.9%)
インドネシア	538人 (488人)	343人 (122人)	63.8% (27.2%)
フィリピン	435人 (380人)	238人 (96人)	54.7% (25.3%)
ベトナム	180人 (186人)	173人 (156人)	96.1% (83.9%)

上記がEPA（経済連携協定）をベースに、インドネシア・フィリピン・ベトナムより来日し、日本各地で働き乍ら学ぶ看護師・介護福祉士候補者が“2022年度国家試験”に挑戦し、その結果となる合格者数であり（厚労省2023・3・24発表）、本件を一昨年、昨年に続きレポートさせていただきます。

EPA看護師・介護福祉士候補者にとり、日本受験者と全く同様の日本語に依る受験であり、極めて難関であることには変わりありません。ただコロナ感染渦の下でも、昨年度よりは収束気味でもあり、受験生の生活・学習環境も改善され、関係者の支援も強化されて、昨年に比べ合格者数、合格率共に大幅アップとなっております。特にベトナムの介護福祉士の合格率は、一昨年、昨年に続き、今年も日本全体の合格率を上回っております。また厚労省発表に依ると、今回合格したEPA介護福祉士候補者754人

が所属している全国の介護施設数は333箇所となっております。

前回にも記しましたが、看護師候補者は来日後に、年一度の国家試験に2-3回挑戦し、滞在期間は3年ですが、試験結果に依り、1年延長して受験可となり、また、帰国後も再受験可となっておりますが、渡航・滞在の費用負担が生じます。介護福祉士候補者は3年間の現場での実務経験を経て4年目の受験となりこちらも成績に依り、1年間延長可となっております。

このEPA看護・介護候補者受入れ制度は、インドネシアが2008年、フィリピン2009年、ベトナム2014年にスタートしており、下記します様に、先ず本国での日本語等の研修を受けて、現状では、インドネシアからは日本語能力”N-4”、フィリピンからは”N-5”、ベトナムからはもっと厳しく”N-3”取得を入国条件となっており、フィリピンも”N-4”にする様

に、フィリピン政府と交渉中とのことです。

ご存知の通り、このEPAに依る受入制度とは別に「介護」については”技能実習制度”でこの分野も追加され、更に、2019年4月からスタートした”特定技能制度”（正式に’外国人労働者’として受入れ12業種を決められております）でも介護受入れもOKとなっています。尚いづれの制度でも国家試験に合格すれば、家族帯同も可能となります。

2023年度受入れ予定数と研修担当機関とその期間は下記の通り。○内は昨年度の数字。

	看護師候補者数	介護福祉士候補者数	合計
EPA候補者数	53人 (62人)	644人 (662人)	697人 (724人)
インドネシア	16人 (17人)	299人 (280人)	315人 (297人)
フィリピン	15人 (23人)	218人 (236人)	233人 (259人)
ベトナム	22人 (22人)	127人 (146人)	149人 (168人)

研修担当・機関

	本国	日本
インドネシア	国際交流基金 6カ月間	AOTS (海外産業人材育成協会) 6カ月間
フィリピン	国際交流基金 6カ月間	(株)アーク・アカデミー 6カ月間
ベトナム	(株)明光 Network Japan 12カ月間	(株)アーク・アカデミー 2カ月間

尚、上記3カ国候補者はいずれも2023年6月頃の来日を予定しているとのことです。また政府間協定では、各国共に年間受入の看護師候補者数はmax200人、介護福祉士候補者数はmax300人となっている由ですが、特に看護師候補者の大巾未達が続いており、本制度の根本的見直しが必要かと思われます。

上記の通り、インドネシア候補者は来日後ATOS（一般財団法人 海外産業人材育成協会）東京研修センターと関西研修センターに分かれて6カ月間研修を受けますが、その人数は前者で、介護福祉士候補者80人、後者で看護師候補者16人及び介護福祉士候補者は219人、計235人との事です。コロナ感染以前に

は、毎年大阪大学外国語学部インドネシア語専攻学生がATOS関西研修センターを訪れ、懇親の集いを深めていただきましたが、今年は是非共その復活・実施をお願いしたく念じております。

この国内での研修終了後の12月末に、各候補者は事前に”MATCHING”（JICWELS・国際厚生事業団の仲介に依る）を経て各々合意済の日本各地の病院や介護施設に赴き、働き乍ら学んで国家試験の挑戦となります。彼等にとり、厳寒時の新任地への赴任となりますので、一般社団法人日本インドネシア協会（会長 福田康夫氏）が毎年全員に冬物衣料を提供しており、昨年末もインドネシア候補者3名の代表がAOTS桑山信也理事長と共に、お礼の挨拶の為福田康夫会長を訪ねており、候補者各人の自筆メッセージや多彩な絵・写真を手渡しており、福田康夫会長からは現場でしっかり学び、貴重な体験を重ねて、将来は母国・インドネシアでこの分野での主導的役割を果たして欲しいとのお言葉で激励されておられました。

南十字星会員の皆様におかれましては、各人にとり異国の地である日本各地の病院・介護施設で日夜真面目に働き、懸命に学ぶ彼等との出会いやお見かけの機会があれば、進んで暖かい激励の声を掛けていただきたく特にお願ひ申し上げます。



書道



グループミーティング

(写真提供: AOTS)

Salam dari kampus!

キャンパス便り

大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻
原 真由子

2022年度の新入生入学以降およそ1年間の専攻語の様子を報告いたします。新型コロナによる活動制限が徐々になくなり、中断していた活動が復活し始めた1年でした。インドネシアへの留学も可能となり、多くの学生が渡航し、現地でインドネシア語や文化を学んでいます。

インドネシア留学生協会 (PPI) 大阪奈良支部との交流

定期的にインドネシア語専攻の学生が行なっているインドネシア留学生協会 (PPI) 大阪奈良支部のメンバーとの交流イベントが、2022年度は2回行われました。1回目は5月14日に万博記念公園で、2回目は6月29日に箕面キャンパスの学生交流スペースで実施されました。



PPIとの交流会 (箕面キャンパスにて)

夏まつり

大阪大学では各キャンパスで学園祭が開かれます。箕面キャンパスにおける学園祭は「夏まつり」です。2022年度は7月9日に開催され、インドネシア語専攻は1年生が中心となり pisang goreng を作り販売しました。



夏まつり

ジョグジャカルタスタディーツアー

コロナ禍で見送られていたインドネシアへのスタディーツアーが復活し、菅原由美先生の引率のもと、1～3年生の計29人が9月14日～26日の約2週間、ジョグジャカルタに滞在しました。その間、ガジャマダ大学の協力を得ながら、各種講義を受講する他、グループごとにテーマを設定し、学生や地元の人々へのインタビュー調査も実施しました。また、3年生は、大阪大学未来基金による「学部学生による自主研究奨励事業」として研究費補助を受け、コロナ禍がインドネシアの大学生の生活にどのような影響を与えたのかというテーマで、アンケートやインタビューによる調査を現地で実施しました。得られたデータを帰国後に集計、分析し、その研究成果を吹田キャンパスの学園祭であるいちよう祭において先日発表したところです。



ボロブドゥールにて

語劇祭

夏まつりと並んで箕面キャンパスで欠かせないイベントが、語劇祭です。2022年度は、11月26日～27日に開催され、20専攻語が参加しました。インドネシア語専攻は、2年生が中心となり、Timun Mas というジャワの民話をもとにした劇を上演しました。

子供がどうしても欲しい年老いた寡婦が、悪魔 raksasa に将来大きくなったら自分に提供することを条件に Timun Mas を授かるのですが、果たして大きく成長した Timun Mas は本当に悪魔に食べられてしまうのか？というお話です。驚くことに、年老いた寡婦の役を男子学生がダブルキャストで演じました。練習を始めた頃は、とても女性には見えなかったのですが、本番ではそれなりにお婆さんらしく仕上がっていました。



語劇

卒業論文口頭試問と卒業式

毎年、卒業論文提出の後、後輩が見守る中、口頭試問を行います。2022年度は5人の4年生が1月20日に卒業論文を提出、2月7日の口頭試問をクリアしました。卒業論文のタイトルは、以下の通りです。

1. 「インドネシアの法律と報道から見た経済連携協定(EPA)に基づく看護師の送り出しの背景」
2. 「インドネシアにおける医学教育及び医師免許取得に関する制度変革とその背景(2003年～2013年)」
3. 「インドネシアのプロサッカーリーグ(リーガ1)におけるクラブとファンの関わりについて～イングランドと日本との比較から～」
4. 「インドネシア西スマトラ州サワレントにおける観光まちづくりとその課題」
5. 「アチェにおけるスマトラ沖地震後のメンタルヘルスケアの実践」

卒業式は、いつもより開花が早かった桜が見頃の3月23日に、例年通り大阪城ホールで開催されました。卒業式の後、春雨の降るなか、外国語学部と大学院の卒業生は近くのビルに移動し卒業証書を受け取りました。



卒業証書を手



卒論試問後の懇親会

新年度開始

2023年度が始まり、11人(日本語専攻1人含む；男子4人、女子7人)の新入生が入ってきました。授業はまだ始まったばかりですが、積極的に質問をよくする、活発な学生たちです。

コロナ禍による制限は昨年度からかなり少なくなりましたが、新年度に入り、授業中には着用必須だったマスクが不要となりました。語学の授業において、正しい発音と聞き取りの訓練のためには、口を覆い隠してしまうマスクは非常に障害となっていました。マスクなしで授業ができるのは外国語学部には朗報です。とはいえ、コロナ感染者が再び増加の兆しもあり、引き続き注意が必要です。



新入生

kisah saya di Osaka

大阪大学人文学研究科
外国学専攻特任教員

Cynthia Vientiani
(シンティア・フィエンティアニ)



白川郷にて

Selamat pagi, siang, sore, atau malam Bapak Ibu, Beberapa waktu lalu, Ibu Hara berkata kepada saya bahwa alumni Jurusan Bahasa Indonesia punya buletin dan saya diberi kesempatan untuk mengisinya. Wah, tentu saja saya senang sekali. Baiklah, saya akan mulai berbagi pengalaman selama tinggal dan mengajar di Osaka. Seperti diketahui bersama, pepatah mengatakan “tak kenal maka tak sayang.” Karena itu, izinkan saya memperkenalkan diri terlebih dahulu, ya. Kenalkan, saya Cynthia. Saya berasal dari Indonesia. Saya lahir dan besar di Jakarta. Orang tua saya berasal dari Sumatra (Minang dan Batak), sedangkan keluarga suami dari Jawa Barat (Sunda). Ya, begitulah percampuran sukunya.

Oh ya, selama di Indonesia, saya mengajar di salah satu fakultas di Universitas Indonesia, Depok, Jawa Barat. Depok di mana, ya? 😊 Kalau lihat peta, jarak Jakarta ke Depok kira-kira 30 km dan di antara Kota Jakarta dan Bogor, ya. Dari Depok inilah saya hijrah ke Osaka, Jepang. Sebab, saya mendapat kesempatan emas mengajar di Universitas Osaka. Singkat cerita, saya, suami, dan kedua anak saya akhirnya tinggal bersama di apartemen dosen di Minoh. Tidak terasa, sekarang memasuki tahun

kedua kami di sini.

Saya ingat pertama tiba di Osaka, saya mengalami gegar budaya, terutama karena kendala bahasa. Waktu tiba di Bandara Kansai, saya melewati berbagai prosedur dan para petugas di sana tidak ada yang berbahasa Inggris. Jadi, saya ikuti arahan mereka tanpa perlu mengerti secara verbal. Tapi, saya beruntung karena tahun lalu masih ada korona, jadi masker dan diam adalah penyelamat dalam kegagalan berkomunikasi 😊. Bukan hanya itu, awal tinggal di sini, saya kesulitan untuk menemukan makanan halal. Di sekitar apartemen, restoran halal tidak ada. Jadi, kalau mau cari restoran halal harus menempuh jarak sekitar 1-2 jam dengan kereta ke pusat kota. Namun, untuk berbelanja bahan kebutuhan sehari-hari, masih lebih mudah bagi saya. Saya bisa berbelanja di supermarket lokal untuk membeli beras, sayur, dan makanan laut di sini dengan kualitas dan harga sesuai. Alhamdulillah juga sekarang mulai banyak masjid atau toko halal di sekitar Osaka yang menyediakan bahan kebutuhan pokok untuk kami. Jadi, masalah makanan sudah dapat diselesaikan dengan mudah.

Di sisi lain, saya menemukan hal yang sangat keren dari Jepang. Saya melihat bahwa pemerintah Jepang secara hebat mengelola masyarakatnya, mulai dari transportasi, kebersihan, kesehatan, dan lainnya. Dalam sistem transportasi, saya sangat mengapresiasi kereta dan bus di Jepang dengan jalurnya yang menggurita. Selain itu, kesadaran masyarakat dalam bersepeda dan berjalan kaki adalah hal yang patut dicontoh. Sebab, kesehatan badan dan lingkungan dapat terjaga dengan baik berkat pola ini. Di Indonesia, sudah terlalu banyak motor, ojek, dan mobil pribadi, tetapi minim perbaikan fasilitas dan kendaraan umum. Karena itu, kami cenderung malas berjalan kaki dan memilih naik ojek walaupun jaraknya dekat. Bagaimana dengan kebersihan, wah jangan ditanya, saya takjub melihat masyarakat dan pemerintah Jepang bahu membahu mengelola sampah. Pengelolaan sampah menjadi tanggung jawab bersama. Kembali lagi, saya pikir kesadaran masyarakat dan dukungan pemerintah adalah kunci yang utama. Saya berharap Indonesia dapat mencontohnya dan memulai secepatnya.

Terakhir dan tidak kalah penting, yaitu kegiatan mengajar dan belajar di Universitas Osaka. Yang saya rasakan selama bekerja di universitas ini, para kolega dan manajemen sangat profesional dalam bertugas. Mengajar, meneliti, memberi sumbangan ilmu diterapkan secara baik untuk kesejahteraan bersama. Kegiatan mengajar di kelas pun sangat

menarik dan menantang. Saya melihat, karakter mahasiswa Jepang pendiam dan pemalu. Mahasiswa cenderung mendengarkan daripada berbicara. Walaupun sebenarnya kalau ditanya satu per satu dan diajak berdiskusi, mereka akan mengeluarkan pendapat atau ide yang tajam dan menarik. Demikianlah, saya rasa cukup sekian cerita saya. Saya sangat menghargai dan bersyukur atas setiap jengkal kehidupan saya di Jepang. Semoga di lain waktu, kita dapat bertemu. Sehat dan sukses untuk semuanya.

Salam takzim,
Cynthia

【新出重要単語】

(原文を自分で翻訳される方の為の参考用として)

hijrah=転居・移住する
gegar budaya=カルチャーショック
kendala=ネック
kegagalan=挫折・機能不全
menempuh=tempuh距離・距離を行く
keren=カッコいい
mengelolah=kelola管理する・マネジメントする
kesadaran=意識
menggurita=gurita 蛸
minim=極めて乏しい
takjub=驚嘆する
bahu membahu=力を合わせる
diterapkan=適用・応用する
menantang=tantang挑む・挑戦する
jengkal=指尺

大阪での私の物語

Bapak Ibuの皆さん お早う、今日は、今晚は。

過ぎし幾ばくの折に、原先生が私にインドネシア語専攻卒業同窓の会報と私にその掲載の機会を与えて頂くと言うお話がありました。わあ、勿論のこと私は大変有難いです。よろしいとも、私は大阪で住み教えている間の色んな経験をシェアすることから始めましょう。ご一緒にご存知のように、諺曰く“知らなければ好きになれない”と、故に、何はさておき私に自己紹介することをお許し下さい、それで、どうか宜しく、私はシンティアです。私はIndonesia 出身です。私はJakartaで生まれて育ちました。私の両親はSumatra(Minang=MinangkabauとBatak)で、一方、主人の家族は西Jawa (Sunda) からです。それで、そのように、種族は混じっています。

Oh ya,(そうです)、私はインドネシアでは、西Jawa DepokのIndonesia 大学のとある学部で教えていました。Depokは何処ですか、地図を見ると、Jakarta からDepokへの距離は約30km、でJakarta とBogorの町の間にあります。このDepokから私は日本の大阪へ移住しました。それで、私は大阪大学で教える絶好の機会を得ました。手短かに話せば、私は主人と二人の子供とも箕面の大学教員アパートと一緒に住むことになり、今ではここで2年目に入っている感じがしません。

私は最初に大阪に着いた時のことを覚えています、私はカルチャーショックを経験しました、先ず言葉がネックだったからです。関西空港に着いた時、私は色んな手続を経ました。そしてその場の全係官には英語を話す人がいませんでした。それで、言葉を理解する必要がなく、彼等の指示に従いました。しかし、私は幸運でした、何故なら、過年はコロナがまだあり、それで、マスクと沈黙がコミュニケーション障害の救いとなりました。それだけではありません、そこでの居住の初めは、ハラルの食べ物にめぐり会うのが困難でした。アパートの近くでは、ハラルのレストランはありません。それで、ハラルのレストランを探したい時は電車で大阪市中へ1~2時間の距離を行く必要がありました。とは言え、日常品材料の買い物をするには、まだより容易でした。お米、野菜、そして海産物を此処では合った品質と値段で、地場のスーパーマーケットで買い物をすることが出来ました。お蔭さまで更に、大阪近辺には今では多くの

回教寺院や我々が基本的に必要とする材料を揃えているハラルのお店が出来て、食べ物問題は容易に解決出来ました。

他の面では、私は日本からの大変カッコいい事柄に出会いました。日本政府が並外れた方法で、交通を初め、衛生、健康その他で住民社会を管理していることに会いました。交通システムでは、私は、蛸足のように広がるルート of 電車バスを有難く高く評価しています。それに、住民の自転車や歩行に関する意識はお手本にすべきことです。それ故、身体の健康と環境はこの習慣慣習によってよく維持することが出来ます。インドネシアでは、バイク、バイクタクシー (ojek) が多すぎます。然し、公共の設備や交通機関の改善は極めて乏しいです。それ故、私は歩くのがおっくうになり、近距離であっても、ojekに乗ることを選ぶ傾向にあります。清掃はどうか、わあ~訊かないで、住民と日本政府が力を合わせてゴミの管理をするのを見て私は驚愕しました。ごみの管理は共同の責任になっています。また戻りますが、私は住民の意識と政府の支援は特別な鍵であると考えます。インドネシアがそれをお手本にすることが出来て、出来るだけ早く始めることを望んでいます。

最後に何よりも負けず劣らず重要な事は、大阪大学で教え、学ぶ仕事です。大学で働いている間に私が感じことは、全ての同僚、マネジメントがその役職で大変プロフェッショナルなことです。教えること、研究、学問への貢献はお互いの豊かな暮らしの為のよい方法で適用されます。クラスでの授業活動も大変魅力的で、チャレンジングです。私は日本の学生のキャラクターは寡黙で恥ずかしがり屋だと見ています。学生は話すよりも聞く傾向にあります。本当のところ、一人一人に訊ねディスカッションに誘ったら、彼らはシャープで魅力的なアイデアや意見を発言します。こんな具合で、私の話は以上で充分だと感じます。私の日本での生活の総ての指尺を大変評価し感謝しています。別の機会にお目に掛かれよう。皆さんにご健康とご成功を。

敬具 Cynthia

【訳：M.Masutani (1956年卒)】

留学体験記

堀口 愛花 (インドネシア語専攻4年)



2 022年の8月から12月まで、約4カ月間、バンドンのインドネシア教育大学付属の語学学校(Balai Bahasa UPI)で留学しました。同時期に、インドネシア語専攻からは、他に3人の同期と3人の先輩方がインドネシアへ留学に行きました。

私は休学をせずに留学をすると決めたので、少し短い期間になってしまいましたが、本当に充実した4カ月でした。私にとって初めての留学。インドネシアで留学できて良かった、と心から思っています。



月 曜日から木曜日、10時から15時まで、語学学校で授業を受けました。午前中は、教科書に沿って授業が進みます。午後は、インドネシア教育大学の学生が先生役となって授業をしてくれます。午後の授業では、話す練習、聞く練習をします。例えば教育問題、民族、結婚など、特定の話題に対する自分の意見を述べる練習をしました。先生(学生)の意見を知れる時間でもあり、私は午後の授業が大好きでした。金曜日はbatikの授業です。実際にbatikを作りました。放課後は、友人とカフェで勉強したり、一緒に夜ごはんを食べに出かけたり、サークルに参加する日もありました。土曜日には、バンドン市内の大学の留学生たちが集まってスダの文化を



学ぶイベントがありました。

インドネシアへ留学してみて、驚いたことがたくさんあります。イスラム教への信心深さは人によって様々なこと。スダ語を日常的に使う人の多さ。おいしい食べ物が安いこと。横断歩道がないこと。道端にたくさんいる猫。「心の友」という歌が有名なこと。それから、忘れもしない、laronという虫の存在。laronが扉の隙間から部屋に侵入してきた時には、泣きました。逃がそうと扉を開けると、外の蛍光灯に無数のlaronが集まっていて、あまりの恐ろしさに圧倒されて涙は止まりました。



嬉 しかったことも、たくさんあります。多くの方が日本を好いてくれているということ。現地でコロナに感染した時、語学学校の先生、友人、一緒に留学していた先輩たちが食べ物を持ってきてくれたこと。先生が持ってきてくれたスイカ半玉と、友人が持って来てくれたスイカ半玉、一人で一玉のスイカを食べた時、本当に幸せでした。

一番嬉しかったのは、心を許せる友人ができたことです。大切な友人に出会えました。Mentariちゃんは、無邪気で可愛らしい子です。カフェで一緒に勉強したり、コンサートに一緒に行こうと誘ってくれたり、一番長く一緒に時間を過ごした友人です。今度の夏休みに日本に来る、とのことなので、会いに行こうと思います。Cicinちゃんは、年上のお姉さんです。色々なところに連れて行ってってくれたり、困っていることはないか、と気にかけてくれたりしました。本当のお姉ちゃんみたいに思っていていいよ、と言ってくれましたが、そう言ってくれる頃にはもうすでに本当のお姉

ちゃんのように思っていました。Yayaちゃんは、私をお家に呼んでくれました。コーランの解説書を開いて、お気に入りの言葉をたくさん教えてくれました。こういう話（信仰に関わる話）しても大丈夫？と確認してくれる、本当に優しい子です。日本語専攻のAuliaちゃんと私は、好きなこと、苦手なこと、性格が似ていて、一緒にいると居心地が良いです。今も連絡をとっており、1カ月に一度は、zoomを使っておしゃべりをしています。お互いの言語を教え合ったり、他愛もないことを話したりします。このおしゃべりの時間が、現在就職活動中の私の癒しの時間です。



多くの人の助けがあって留学を叶えることができたこと。留学先で、先輩、先生、優しい友人たちに支えられて日々を過ごしたことです。これからも忘れないでいたいと思います。

次に桜が咲く頃には、社会人になります。社会人になっても、インドネシア語、インドネシアという国とは繋がってほしいです。まずは、無事に卒業できるように、卒業論文の執筆に励みたいと思います。最後までお読みいただき、ありがとうございました。



(事務局注)

心の友 (五輪真弓の曲)

「心の友」(こころのとも)は、五輪真弓が1982年に発表したアルバム『潮騒』に収録された楽曲である。シングルカットされず、テレビ・ラジオでの楽曲披露がなかったため日本では一般に知られることがなかったが、1980年代中頃にインドネシアで普及し、第2の国歌と言われるほど世代を超えて日本語で歌い継がれている。

インドネシアでの人気

1983年に、五輪のコンサートで同曲を聴き感銘を受けたインドネシアのラジオ関係者が、アルバムを持ち帰り現地で放送したのをきっかけに広まり、1985年頃には大ヒット曲となった。その後、中学校の音楽の授業で課題曲にもなった。評判を受けた1986年、五輪がジャカルタでコンサートを開催し、1987年には日本での知名度は低いままだったが、第38回NHK紅白歌合戦で歌唱している。

2004年スマトラ沖地震の被災者たちが口ずさみ、心の支えになったと言われる。

2005年には、スマトラ沖地震チャリティ・シングルとして、五輪とDELON(インドネシア語版) がデュエットし日本で発売された。

2014年、駐日インドネシア共和国大使館公邸にて開かれたTV番組「Kokoro No Tomo POP!」の記者発表会で五輪とCHEMISTRY川畑要がデュエットで披露した。同発表会には安倍昭恵総理大臣夫人が来賓として出席した。

2015年には、ジャカルタで行われた第7回ジャカルタ日本祭り閉幕式で、五輪とロックバンドJ-Rocks(インドネシア語版)と学生による日本語ミュージカル劇団「en塾」の共演で披露された。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
[https://ja.wikipedia.org/wiki/心の友_\(五輪真弓の曲\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/心の友_(五輪真弓の曲))



今回は、南十字星会をもっと発展させる為の方策について会員有志間で放談したい。

今回の参加者は5名で、発言者は匿名（A、B、C、E、D）とします。司会進行をA氏にお願いします。

A：今回は下記の件についての放談です。忌憚のない意見ををお願いします。

- ① 外国語学部の現状と専攻語の就職状況について
- ② 現役生へのアドバイス
- ③ 卒業生と現役生との交流状況
- ④ 同窓会(咲耶会)や南十字星会の活性化について
- ⑤ その他

① 外国語学部の現状と専攻語の就職状況について

A：16年前に阪外大と阪大が統合し、環境がかなり変わりました。最近の学部の募集人員は550名で阪大の学部の中では一番多い。統合により阪大の学部学生数は東大を抜いて国立大学でトップ(15,250人)。

C：大昔だが、インドネシア語学科には毎年一人ぐらいの女子学生が居たが、その後女子学生の4大進学率の増加に伴って、専攻語学科の女子率が大一大半に。

B：昔は、インドネシア語科指定の求人が多くて商社への就職も多かったが、商社は女子の採用を敬遠する可能性があるなあ。

C：専攻語の卒業生の就職状況は昔のように良好なのだろうか？

D：就職については、同じ会社への継続就職が通常だろう。昔は先輩が活躍しているから後輩を採用する企業も多かった筈だ。

A：インドネシア語専攻の募集人員が半減し、10名となって久しい。女子学生の増加と相まってその後、男子学生が入学しない年もあり、これは専攻語学科としては大きな負の遺産だ。令和6年度から外国語学部の募集人員が18名となった。ところが、今年度(令和5)のインドネシア語学科の応募者は10名で全員が合格したらしい。

C：それは無試験と同じだってこと？

D：センター試験の成績もあるので、無試験ではないだろうが、応募者が10人だったのは、募集人員の増加を要望してきた関係者にとっては恰好が付かないね。

A：これに関しては、2点を指摘したい。一つは、インドネシア語を学ぶことの優位性のPR、2つ目は受験生の範囲を広げる為に、外国語学部の入試を後

期日程に重点を移すこと。

B：多様な人材が応募できるように、また入試偏差値をもう少し上げる為には、後期日程が良さそうだね。

E：インドネシア語学科で男子学生数の極端な減少は商社への就職に悪い影響を与えていると思うね。募集人員の半減は痛かった。

D：卒業生の就職先を正確に把握し、交流を深めるのは後輩の就職活動にも益すると思われる。

E：それは確かなので、大学当局や咲耶会にお願いしたいな。

② 現役学生へのアドバイス

A：次に就職に関係する重要な事として現役学生へのアドバイスを。

A：現役学生の現状についてはどうなのか？学部並びにインドネシア語を選択した理由を知りたいね。

D：大阪大学外国語学部の教育理念は、以下のような内容です。「外国の言葉とそれを基底とする文化一般について、理論と実際にわたって教授研究し、国際的な活動をするために必要な広い知識と高い教養を与え、言語を通じて外国に関する深い理解を有する有為な人材を養成すること」を理念としている。私の卒業証書には、「言語地域文化学士」と書かれている。

C：昔の阪外大の志望者は言語学者になる積りはなく、インドネシア語を学びそれを生かして世界に羽ばたきたかったからで、アジア世界の発展に伴い、インドネシア語学科には語科指定の求人が多く、英語堪能者としても広く産業界に卒業生を送り出していた。

D：最近では、インドネシア専門商社除いて、商社や一般の企業の海外部門では基本的に英語が標準になっている。特に1990年台後半からのグローバル化が進展してからはビジネスで使用される言語は英語が世界を席卷している。それ故に、専攻語だけではなく英語の運用能力を高めるための必要がある。例えば「英語」+「専門語」である。

C：最近誰でも英語の習得に努力をしているので、外国語専攻の卒業生が英語運用能力で他校の卒業生に負けるようでは情けないね。

D：少し前に、東外大の非常勤講師が或る雑誌に書いていたが、一つの外国語習得だけでは就活では勝てない。また英語堪能者としても、大学入試時の英語力だけでは不十分であると。

E：個人の努力次第だが、「英語運用能力」+「専攻語」、そして欲を言うなら、「リベラル・アーツ」

(教養教育)の習得だろうね。

- A:あまり欲張っても、「しんどい」。しかし敢えて言うなら、何のために大学に入学したのだと問いたい。アルバイトなどで社交術を身に付けるのも多少は必要だろうが、本末転倒で情けない。
- B:4年間で学べなかったものは、社会人になってから企業内での実業やリカレント学習で自分を磨くこともできる筈だ。
- C:総合大学である利点を生かして、法学部や経済学部などで他の分野の授業を積極的に履修すればよい。
- B:楽しい学生生活を終えて、最後の仕上げが就職活動だが、どこの大学でも、就職活動の支援には熱心ですよ。関東の大学の例を挙げると:
- ①2回生の終わり頃に大学と就活情報誌により情報を収集する。
 - ②3回生になると会社研究をし、「インターンシップ」に参加する。
 - ③約2年前から会社や先輩を訪問する。
 - ④各社の採用状況等を把握し、「エントリーシート」の準備・研究をする。
 - ⑤「エントリーシート」作成後に会社への対応、面接の準備もする。等大学が熱心に指導しているようだ。
- この点で、経験豊富な先輩と現役学生との交流を深める場の設定が望まれる。お互いにアプローチするように努力する必要がある。
- A:教えて貰う方がもっと積極的に働きかける必要があると思うね。専攻語学科の先生の協力も必要だろう。

③ 卒業生と現役生との交流状況

- A:かつて咲耶会でも交流促進を計画したと思われるが、中々難しいようだ。有名な「稲門会」「三田会」のようには行かないだろう。国立大学の同窓会はおしなべて同窓会活動は不十分に思える。私学は「入学」や「就職」は存続の死活問題なので必死に頑張っている。
- B:咲耶会の東京支部は昔から月例会などを開催し月例講演集なども発行し、活発だが地元の大阪などは他の支部より不活発だ。
- C:現在25語専攻があり、それぞれ卒業生を送り出しているが、他の語専攻同窓会の動きは分かりづらい。語専攻同窓会組織の活性化が必要だろう。卒業後の「語専攻」同期生間と「各部・サークル」同期生間の交流は続いているのだから、この点をもっと考える必要があるだろう。
- E:南十字星会会員、現役学生、先生との定期的な懇親の場を設けるのが良い。企業経験を積んだO

B・OGとの交流は現役学生には役立つ筈だ。具体的には、定期的に新キャンパスで開催するのが良いだろう。

- D:今では南十字星会の東京支部がメーリング・リストで情報交換をしている。大学の先生方も参加しているし、現役学生もこの仲間に入って情報交換をしたらよい。特に、総合商社で大活躍をされた経験豊富な先輩が沢山おられて、有益な情報を得られると思う。
- A:これからは、例えばZOOMなどを活用して情報交換の機会が増えれば良いと思う。

④ 咲耶会や南十字星会の活性化について

- A:現在25語専攻があり、それぞれ卒業生を送り出しているが、他の語専攻同窓会の動きは分かりにくい。語専攻同窓会組織の活性化が必要だろう。卒業後の「語専攻」同窓生間と「各部・サークル」内の交流は続いているのだから。
- C:組織は、縦糸と横糸が整備されてこそ強力になる筈で、横糸だけでは安定性がない。
- B:咲耶会の中に専攻語同窓会の存在を明確にし、提携する必要性を感じている。
- C:阪外大卒と阪大卒との間に変な蟠りがなければ良いがと思っている。
- D:そのようなものは無いと信じるが、もし有るとすれば同窓会も現役学生も大学当局にとってもマイナスだね。
- E:専攻語同窓会として「南十字星会」は良く纏まっていると思うね。このつながりを大切にしたい。

⑤ その他

大阪大学の現況について

- A:情報化がますます進展し、入試偏差値、各種ランキングなど情報が溢れている時代である。最近「旧帝国大学7校」の評価が高く、阪大は総合的に東大、京大、に次ぐ3位を占めている。そのような環境の下、大阪大学外国語学部も一層頑張ったいものだ。
- B:THE世界大学ランキング2023の日本の大学ランキングで阪大は4位と評価は高い。
- C:外国語学部の箕面新キャンパスは来年度には地下鉄御堂筋線の延長線駅が完成し大変便利になるし、中之島には阪大センターもあり、積極的に利用すれば良いと思う。

各位の忌憚のないご意見、どうもありがとうございました。

時節柄ご自愛頂きますようお願いして「放談」を終了いたします。

プラムディア・アナンタ・トゥール作品を読みましたか？

宮崎 衛夫 (1965年卒)



すでに読まれた方には失礼ながら、南十字星会の仲間でも未読の方が意外と多いのを知り、時間を見つけて是非読んで欲しいとの思いで、あえて投稿させていただきました。

プラムディア・アナンタ・トゥール

プラムディア (1925～2006年) はノーベル文学賞の候補に何度も名が挙がったインドネシアを代表する文学者である。1988年に国際ペンクラブの Freedom-to-Write賞、1995年マグサイサイ賞、さらに2000年に福岡アジア文学賞で大賞を受けている。

プラムディアは1945月の独立宣言後に、インドネシアを再征服しようとして侵攻してきたオランダ軍によって、反オランダ思想を持つとの理由によって逮捕され、インドネシアが真の独立を達成する1949年12月まで獄中にあった。その後、オランダ植民地時代にインドネシア・プリブミ達が、独立への道を模索した中での苦悩をテーマに、執筆活動を続けた。

1965年9月30日事件後、インドネシア共産党との関係を疑われ、政治犯として逮捕されブル島に送られた。文明から隔絶した流刑生活は10年以上にも及んだが、獄中で大河小説「ブル島4部作」を完成させた。

私が1990年前後にインドネシア駐在のときには、プラムディアはジャカルタ郊外の自宅で軟禁状態であった。あるインドネシアの知人から、「もし本人に会いたければ、いつでも彼の自宅まで案内するよ」と言われたが、その時はさして気を留めていなかったのも、実現することはなかった。今となつては、貴重な面会のチャンスを逃したと悔やまれる。1998年のスハルト政権崩壊後に、プラムディアは完全に自由の身になった。それまでインドネシアでは、長い間プラムディアの作品は発禁となっていたが、水面下で一部の人たちが回し読みしていたと伝わっている。

帰国後にプラムディア作品の翻訳本がめこん社から出版されているのを知り購入したが、大作が多く多忙にまぎれ「積読」になっていた。それから退職後にじっくりと読むことができた。インドネシアの人々が植民地時代のオランダ圧政下で受けた苦難や、独立に向けての遠い道筋を知ることになった。というのは、プラムディアの作品には、独立への礎を作った人物や団体も登場し、名前は変えられているが、かなり史実に基づいているのだと実感できる。